

仲尾俊博著

「日本初期天台の研究」

白土わか

この書の題名の示すような日本初期天台の研究書は、かつて決して多いとはいえず、研究にはなお残された課題の多い分野であったが、昭和四十八年度においてわれわれは、つぎつぎとすぐれた業績に恵まれた。仲尾俊博教授著「日本初期天台の研究」、浅井円道教授著「上古日本天台本門思想史」であり、また福井康順博士編「伝教大師研究」もそれに華をそえるものであった。

ここでは仲尾教授の著書について読解をすすめたいと思うが、種々の煩雑な問題をふくむ最澄の周辺と時代と、その教学の理解にはなかなか困難な点があり、私のいたらぬ読解と、ときに愚見に対して、まずおゆるしを頂きたいと思う。仲尾教授は、天台学の権威であった故佐々木憲徳博士の薫陶を多年にわたって受けられて、「伝教大師最澄とその周辺」に深い関心をもたれ、天台業の止観業と遮那業、とくに遮那業形成の道程に深い考察をすすめられた学者であるとおききしている。この書の纏々とした叙述の中には充分それをおききとることができる。

本書は副題を「伝教大師最澄とその周辺」と題し、全篇を十章に分っている。以下順を追うてゆくと、「第一章 論宗と経宗」においては、最澄は論宗と経宗という教判をたて、奈良時代まで盛行した法相・三論二宗は論宗であるとし、それよりも経宗を重んじて、法華経を典拠とする天台教学の研究をおしすすめようとした最澄入唐以前の意図についてのべておられる。その教判は、論は経の末であり経は論の本であるという論理によるが、同じく経宗である華嚴宗によらなかつたことは、法相・三論二宗にくらべ華嚴宗はすでに弱体化していたこと、最澄が鑑真将来の摩訶止観にめぐりあつたこと、新しい佛教を期待しておられた桓武帝への応答ともいふべきものによると理解されている。法華経研究は聖徳太子以来行なわれ、南都の華嚴宗にも元暁や義寂等の注釈書がすでに入り、さかんに研究されたその中で最澄は法華経の研究にうちこみ、鑑真将来の摩訶止観にめぐりあつたこと、鑑真は天台玉泉寺系弘景の弟子であつたこと、玉泉寺系天台は止観中心であり、円・密・戒・禪をならび行なうものであつたこと等、後の最澄の天台教学の萌芽がすでにここにもあつたことについてふれている。

第二章「伝教大師最澄の教判論」は、前章の教判論からさらに進み、最澄の教判は、中国天台の伝統をうけつぎながら、当時の南都六宗や空海の真言宗を対抗として、その教義批判、または現実批判の上に立つて組み立てられたものであるとのべている。法相・三論二宗に対してはすでにのべた通りであるが、最澄の教判の相手は、最もつよくこの二宗にむけられたもので

あった。成実・俱舍宗に対しては同じく論宗の範疇としながら、あまり、これをとりにたてて問題としなかったこと、又、華嚴宗は經宗ではあるが、華嚴經を天台伝統の上での円兼一別の立場とし、さらに最澄独自の見解も加えて、法華經を最勝とし南都の華嚴宗を一段下の經宗であると判定した。律宗に対しては不特定入定入印經の五乘菩薩説により、羊乘・象乗の成佛不特定の、藏通の戒として、真言宗に対する教判は、最澄の大日經研究が不充分であり、天台業中の遮那業についても問題点をのこしたままになつたように、結局、大日經と法華經を約部的に解明することは失敗におわり、対真言宗の教判は結果をみずに了つたと論述している。

第三章「顯戒論に現われた批判精神」においては、顯戒論には烈しい気迫にみちた批判精神が充盈しており、一字一句に最澄の生命がこめられたものであるが、この書に対しては意外なほど註釈書も少く、あまり内容研究もなされていなが、最澄はもっと再評価されるべきものであるという論旨は、まことに賛同を表すべきものと思う。最澄が精魂こめた大乘戒建立の建白書であるからである。さて、本書には最澄の批判精神の根底には摩訶止観があること、天台宗公認の頃に比べて顯戒論撰述の時には最澄には驚くべき成長ぶりがあったことをあげる。南都教団の僧綱の支配を断ちきるためには、顯戒論を心血注いで書かねばならなかったという。当時の南都佛教が一方には勝れた教理を持ちながら、一方には低俗な雑密的な呪術的を行法を行なっているという矛盾をもち、さらに僧尼令によって宗教的活動

は公認の寺院内に限られた結果、大衆から遊離し国家権力と結びつき、観念的学問性格がつよくなり、戒行精進もまた登壇受戒の儀式と化したと指摘している。また声聞の二百五十戒では一切衆生の成佛の道には遠く、それを観念的のものとして捨てたのべていられるが、最澄における梵網戒と具足戒の問題についてはなお考究を要する問題のように思われるが如何であろうか。二百五十戒についての最澄の真意は、にわかに断じがたいと思うのは愚考にすぎぬのであろうか。

さらに顯戒論にあらわれた僧綱佛教への批判、都市佛教への批判、歴史的現実への批判等について論じていられるが、顯戒論における批判の問題は種々の角度より考究されるべきものであり、著者の労と先鞭とに敬意を表したい。

第四章「伝教大師最澄の人間観」においては、山家学生式と顯戒論の上にそれをとらえ、最澄の純粹性を強調している。山林にのがれ世俗の繁栄を拒否し、永遠の生命のみちあふれた一乗法の開顯に努力したのも、この純粹さによるし、それはまた最澄の思想形成のエネルギーであるとしている。山家学生式にあらわれた桓武帝への思慕もそれであるとし、その他、最澄の自己反省や、人間の平等観にふれ、顯戒論巻中における梵網受戒の対象の拡充はそれを示すものであることを指摘している。

ただ残念なことには最澄の生涯はほとんど理論闘争にむけられ、彼の滅後の弟子達は師の真意をくみかねて意見の相違を来たし、在家佛教の歩みを展開するに至らなかつたとしている。

第五章「天台業」においては、とくに遮那業についてのべ、

著者の独自の見解を展開してまことに示唆にとむものとなっている。延暦二十五年正月三日の最澄の上表は、天台法華宗に二人の年分度者を請うたものであったのに対して、同年正月二十六日付の太政官符では、天台業二人、一人には大毘盧遮那經を讀ましめ、一人には摩訶止觀を讀ましめるとなっているのは、どうしてこうなったのであるか。はたして最初から最澄が遮那業を望んだからそうだったのか、それはそうではなくして桓武帝が強く志願されたからであると思われるという論拠に立って、天台業成立のいきさつ、遮那業の持つそれ以後の種々の問題、空海を意識しての苦闘、結局は最澄にあっては法華經と大日經との会通は未解決に了ったことを論述されている。遮那業が桓武帝の志願によるものであろうという点については、第六章桓武政権と天台業の中に再びのべられていて、政治から独立しようとした最澄が、政治の配慮の強い遮那業を成立させることになったのが、遮那業の体系化への悪戦苦闘となった因由であると論じていられる。この論旨はまことに興味あることであり教えられる点が多岐にわたるが、一、二の初歩的な問をのべさせて頂くなら、延暦二十五年正月三日の上表には、天台宗以外の他宗の年分学生に対して、たとえば律宗に二人とあるのが、正月二十六日の太政官符には、律業二人、並びに梵網經若しは瑜伽声聞地を讀ましむ、とあるのは、誰の意向によるものであろうか。かりに律業には伝統があるといっても、官符の旨は官の手によってのみ作られたのであろうか。顯戒論卷上のはじめの護命の言と最澄の箴言とは、それらの機微にふれるところがあ

ると思われるが如何であろうか。唐より帰朝したばかりの最澄にとつて、彼の地における印象はきわめて鮮烈なものであつたらうし、玉泉寺系の天台を受けた最澄に、円・密・禅・戒の四宗を生かすことは自然なことであり、円と禅とは止觀業となり、密は遮那業となり、戒は大乗円頓戒として展開したと推測するのは、あまりにも素人めいた想像にすぎぬであろうか。顯戒論卷中に、興善寺の兩院におのおの一業を安置し、持念真言の者と誦經転読の者とを置かんことを請う不空の牒制をあげて、天台二業の強力な先例となしているのは、如何に理解すべきであろうか。空海に対する對抗意識から表制集を、たびたび例証としてあげた旨を仲尾教授は説いておられる。密教についての研鑽の日のあさい最澄にはそういうこともあろうが、また一方、在唐期間は短く、辺州にしか最澄はいなかったにしても、かつて長安にときめいた不空の評判や事蹟を聞くことはなかったであろうか。在唐期間の強烈な印象が、最澄の行動に影響したことは多分にあつたと想像されるからである。最澄のもたらした密教が、新鮮なものとして桓武帝に映つたであろうし、その要望もあつたであろう。そこにはあるいは相乗作用が働いたかもしれない。しかし最澄自身の意図が中心であつたように理解したいのは私の勝手な想像にすぎぬのであろうか。最澄という人は、純粋な性格の上はかなり思ひきつたことをする人である。素人の意見をのべて不遜のそしりをまぬがれぬものであつたら、何卒おゆるし頂きたいと思う。

第六章「桓武政権と天台業」においては、桓武帝が二大政策

である東北の征討と平安遷都の事業がようやく小康を来し、新しい時代の佛教を天台法華宗に求められたこと、天台業の成立には桓武帝の意志がよく反映していることを中心に論ぜられている。延暦二十五年正月二十六日の官符に示される各宗の業は、南都六宗にあつては伝統や宗祖があること、所依の教典・教理・教判があること、学派があつてのことであるが、日本天台宗は新規のものであり、桓武帝の意向によることが強いという論旨である。天台業のうち遮那業がとくにそうなのであつて、それが止観業の体系にくらべ、遮那業の体系が未完成に了つた原因であるとされている。このことは前章でもふれた点であるが、たしかに大きな示唆にとんだ見方であることは異論がない。桓武帝は最澄の終生の恩人であり、その御意志にそうために、最澄は遮那業の研究時間も少なく、未完の感の深いことにも屈せずに、その研究の大成をめざして、空海に密教受法のことを懇請したのべている。

第七章「天台業と十住心判」においては、天台業成立の事情と、空海の十住心判における天台批判をめぐって論述されている。天台業成立の第一の課程は道邃との出会いであるとし、摩訶止観重視の玉泉寺系天台宗の理解者であり、実践的性格のつよい道邃との出会いが、止観業を形成せしめる因となつていたとみなしている。玉泉寺系統はまた円・密・禪・戒を相承するものであることも前述のとおりである。日本で最澄に天台学の資料をもたらした鑑真の天台学もまたこの系統であつた。しかし道邃の天台教学は、後の四明知礼によって湛然の教学を誤る

ものであると批判されることになり、そのことが影響して後世の日本天台宗では天台業の研究が消極的になつたようにも考えられると、仲尾教授は指摘しておられる。遮那業形成の事情については前にもふれたことであるが、桓武帝の晩年の、和気広世に対する口宣に、最澄闍梨をして朕がために重ねて灌頂の秘法を修行せしめよ、とあるのに注目し、桓武帝の密教への傾斜を遮那業成立の大きな因由と考える一証とされている。この天台業が空海の教判においては、無視されてるのであつて、十住心論の第八に位置づける天台宗は、中国の天台大師による天台教学なのであり、空海は遮那業を密教としては不十分であるとしたに違いないと論じている。

第八章「修禪大師義真」は、天長六本宗書の一である天台法華宗義集を巡つての問題である。天台法華宗義集は日本天台宗の立場を明らかにする意図をもつ義真の撰であるが、天台教観二門の要綱を示すにとどまり、円密一致の立場が鮮明にされていない。また他宗の書に対して些か見劣りがすることなどを手がかりとして論をすすめている。義真は最澄の通訳僧としてともに入唐した人であり、天台法門および円頓戒を道邃より受け、順眺より密教を受けた人であるが、何故、かれの宗義集の中には円密一致の日本天台宗が主張されていないのか。仲尾教授は、義真は最澄の気持を充分知りながら、最澄滅後の叡山の沈滞期に、天台教観の入門概要程度のもを書いたのではないかといわれている。そして最澄は滅後の弟子たちにそれぞれの分担を委嘱したのであり、止観業は主として義真に、遮那業は円澄に、

南都教団や宮中との政治折衝は光定に、延暦寺の経営は仁忠という具合にのぞんだのであろうという。円澄らは最澄の意志をつぎ、空海からの受法を請うていることをあげている。

第九章「遮那業と義真・円澄」は、前章にひきつづき、最澄滅後の弟子たちの動向をのべている。義真の教学は、円頓戒においては充分であったが、遮那業の体系づけ、円密一致の思想形成には欠けるところあり、そこに義真の苦衷があった。義真当時の、真言宗に比べての叡山教団の劣勢ぶりを、教団内の派閥対立、南都教団や真言宗にくらべて政治的手腕の欠除、経済力に対する関心のうすさ、天台法華宗の独立といっても禅庵式のような理想にすぎた点などを列挙して論述されているが、私のよく理解のとどくところではなく、この程度の紹介にとどめさせて頂くこととする。

第十章「遮那業と唐決」においては、日本初期天台宗にとって重要なテーマである遮那業の問題を、唐決を通して考察されたものである。最澄の唐決集は、道邃の決義するものであったが、それには遮那業についてふれるところがない。修禪院未決にも遮那業は出てこない。最澄のあと、天台業の止観業と遮那

業の体系化をはかることのできる人物であると、光定にも認められた円澄の唐決の決答は、天台沙門広修とその弟子維禪によるものであるが、円澄の大日経と法華経の教判上の問題に対して、その決答は、大日経を法華経の前説とする不満足なものであったという。遮那業の研究を通して唐決をしらべてみると、「徳円疑問、宗願決答」が一番のりゆたかな問答であると考え、宗願が大日経を第五時の撰に入れたことによつて、日本天台は台密として前進する拠点をもつにいたつたと論述されている。

以上、仲尾教授の著書に対し、とかく不十分な理解のままに書き綴ったことをおわびすることともに、初期日本天台の研究に、大きな貢献をお与え下されたことに感謝したい。とくにいままで等閑にされがちであった天台業の研究に先鞭をつけられ、遮那業の考察においては全く独自の見解を披瀝された。今後の教授の御研究の成果をまつと同時に、天台業に関わる、山家学生式や願戒論の問題である梵網大乘戒についての御教示をねがうものである。

(一九七三年九月、永田文昌堂 A 五版、三、五〇〇円)